



消えた  
ヤモリ

川崎ゆきお

「ヤモリですか」

「はい、トカゲのような」

「ああ、イモリとよく見違える奴ですな」

老婆が妖怪博士に相談している。ヤモリとイモリの違いを聞いているのではない。腹が赤い方がイモリだ。

「ヤモリがどうかしましたかな」

「捨てられたのです」

「ほう」

「私が驚いたので、ちょうど遊びに来ていた甥が摘み出したのです」

「掴んでですか」

「はい、料理用の分厚い紙で」

「それは勇気がいる。気味悪かったでしょ」

「甥は、そういうのが得意なのです。蛇を見ても驚きません」

「で、それで、何ですか。何が困りごとなのですか」

「ヤモリは手洗いにいました。こんなところで見るのは初めてです」

「初めて」

「はい、だから驚いて、悲鳴を上げてしまいました。手を洗おうと蛇口に手を乗せようとしたとき、洗面の中にいたのです。最初は何か落ちていると思いました。洗面の上は棚でして、そこに洗剤やタワシなどを置いています。他にもいろいろと、それが落ちたのだらうと思いました」

「はい」

「それが動き出したので、驚いたのです。洗面に落ちたのを拾おうとしたときでしたから、それが動いたので、ついうっかり、声を出してしまいました」

「その悲鳴を聞いて、甥御さんが」

「悲鳴というか、何か声を出したかったのでしょうかねえ。怖かったと言うより、ああ、ヤモリかというような感じで」

「それで、甥御さんが」

「はい、すぐに掴んで、捨てに行きました」

「そうですねえ。ヤモリは結構大きいでしょう。殺すほどでもない」

「はい、そうなのですが」

「何か」

「捨てられたのです」

「ああ、捨てに行ったのですからな」

「表通りの植え込み辺りに捨てたと言ってます」

「それで良かったのではないのですか。一般的には」

「はい、どちらか分かりません。戻って来られると嫌なので、遠くへ捨てて来いと甥には言いましたが」

「ヤモリが戻って来ると」

「はい」

「一般的、いや、それほどでもありませんが、ヤモリは家守と書き、家を守っているのですよ。家の宮とも書きます」

「知っています。だから」

「捨てたことが気になると」

「でも、戻って来て欲しいような、欲しくないような」

「初めて洗面でヤモリを見られたと言われましたね」

「はい、そうです。いつもは奥の仏間の壁に、たまに姿を見せます。定期便のように」

「時間が決まっているのですか」

「はい、壁を這うコースも決まっているのです」

「じゃ、ヤモリはいつもよく見かけると」

「季節によって違いますが、この時期はよく見ます。仏間なので、あまり入らない部屋ですから、私が見ていない日にも、出ているんじゃないでしょうか」

「じゃ、そのヤモリとは顔馴染みじゃな」

「はい、そのヤモリかどうかは分かりませんが」

「まあ、似たような形をしておるからなあ。何代目かさんだろうのう。代々家を守っておるのかもしれない」

「はい、それが気になって、表通りの植え込みを探しましたが、いませんでした」

「それはどういうことになりますかな。お婆さん」

「はい、今は戻って来るのを期待しています。やはり、摘まみ出すべきじゃなかったと。それからしばらく経ちますが、仏間の壁を這うヤモリはいません。あれは、やはりなくてはならないものだったのです」

「はい」

「亡くなった爺さんや、ご先祖さんが、ヤモリの形に身を変え、ああして散歩している間は、この家は大丈夫だと」

「散歩ですか」

「はい、私はそれをヤモリの散歩だと思っていました」

「それで相談とは、ヤモリが欲しいと」

「いえ、あのヤモリじゃないと駄目なんです。他のヤモリでは事情を飲み込んでいないと思います。私の家にずっといるヤモリじゃないと」

「じゃ、ヤモリを探してくれ、ですか」

「そんなことで博士を煩わせるつもりはありません」

「はい」

「ヤモリには帰る気があるのでしょうか」

「はあ」

「だから、ヤモリは自分で帰る気があるのでしょうか」

「ああ、そうですねあ」

妖怪博士は思案した。

「はい、じゃ、戸口を少し開けてください。表の戸は不用心なので、窓を少し開けてくだされ」

「そうですね。簡単なことだったんですわね」

「やはり戻って来ない方がいいと、思う面があるでしょ」

「はい、洗面の中にいたので、二度と見たくないと」

「しかし、よく考えると、そのヤモリ、由緒正しき家の守り神の化身」

「そうなんです。薄気味悪いですが、やはりそうだと思います、考え直したのですが、まだ決心が」

「もうお付きでしょ。だから、私のところへ相談に来たのでしょ」

「もし守り神なら、戻って来ますよね」

「はい」

「甥が摘み出したのを怒ってはいませんよね」

「はい」

その後、あのヤモリは戻って来なかった。

しかし、半年後、仏間の壁に再びヤモリが現れ、散歩を始めた。

老婆はすぐに妖怪博士に連絡した。

「形は」

「少し小さいです」

「じゃ、次の代のヤモリでしょう。跡継ぎがいたのしょうなあ」

「はい」

「洗面で見られたヤモリは年寄りヤモリで、ぼけていたのしょう。だから、そんなところに迷い込んだと見るべきでしょうなあ」

「今度はそっと見守ります」

「お婆さん、家を見守っているのはそのヤモリですよ」

「ああ、そうでした」

了